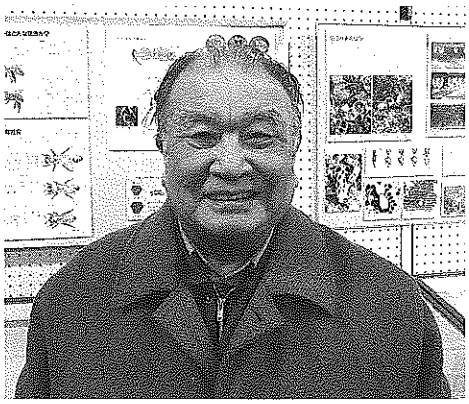
第3回 木にまつわる技術・伝統inいわて

「木にまつわる技術・伝統inいわて」第３回は、宮古市川井で養蜂を行っている大峠長一（おおとうげちょういち）さんを紹介します。


大峠長一さん

大峠さんは、父親の木材生産業を継ぐかどうか考えていたころ、宮古市の藤原埠頭に大量の外材丸太が陸揚げされているのを見て、木材を伐採することでなく山間地で生きていくにはどうしたらいいかを考え、父親が自給程度にミツバチを飼っていたものを、生業として経営していくことを決意しました。

その背景には周辺にトチノキやニセアカシアなどの蜜源となる樹木が豊富に存在していたことがありました。

以来現在まで、養蜂家として規模を拡大しながらご長男といっしょに経営に励んでこられました。

ハチミツ直売所

その間、大峠さんの活躍・実績は多岐にわたり、昭和52年にはハチミツで県の特産品コンクール金賞を受賞、また、２年に一度、世界中の養蜂家やミツバチ製品関連企業、科学者などが集まって開催される国際養蜂会議には７回も出席し、うち４度日本代表団の団長を務めました。

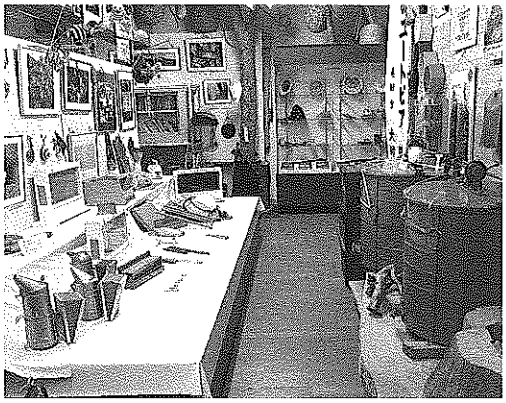
平成９年５月、息子さんが平津戸養蜂トチノキ分収林組合の組合長となり、地元の国有林にトチノキ４千６００本を蜜源対策として植栽し、その後、平成15年には「遊々の森」協定を国と締結しています。

同じく、平成９年に自費で「ミツバチ博物館」を自宅敷地内に開館し、ミツバチの生態や早池峰山麓の自然などをわかりやすく紹介しています。

平成17年度、林野庁主催の森の聞き書き甲子園では森の名手・名人に選定され、岩手県立宮古水産高等学校３年生、摂待希美さんのインタビューに応じました。

大峠養蜂場の製品

一時期は、安価な中国産の輸入ハチミツに押されたこともありますが、国際養蜂会議への出席をきっかけにカナダやフランスなど世界19ケ国を視察し、蜜源が豊富な日本は養蜂に最適だと確信して、価格ではなく品質で勝負しようと決意したとのことでした。


ミツバチ博物館

昭和７年生まれの大峠さんですが、まだまだ元気いっぱいで、「ここ川井地区は、トチノキなど蜜源が豊富であり、畑が少なく農薬の心配がないことが最大の利点。いつも、いかにして最高のものを作るかを考えており、これは生産者としての鉄則である。この地域にしかないすばらしいものを活かして、他にまねのできないことをすることが、ここに生きる人間の使命と考えている。」と話してくださいました。

話題の豊富な大峠さんですし、博物館の見学も可能ですので、皆さんもぜひお立ち寄りください。

林業技術センター普及班
０１９（６９８）１３３７